

付論 松喰鏡と和鏡の中の鶴・亀の展開

天神段遺跡において、松喰鏡は1号墓の北側、埋葬された人の頭近くから出土し、その下には開元通寶（玄宗皇帝の初鑄年621年）があったという。この通貨は、おそらく六道銭のつもりであったであろう。出土状況の詳細については本文に譲るとして、ここではまず松喰鏡について述べることとする。

1号墓の松喰鏡の計測値は、径は10.8cm、縁の厚さは0.765cm、重さが99.8gである。重さから検討してもまさに平安末期の鏡であることが分かる（図1-1）。いわゆる平安末から鎌倉初期の藤原鏡もしかりで、いずれも重さが100g前後であることと共通する。ただし、松喰鏡には鎌倉時代後期に属するものもあるので注意する必要がある。

ところで、鏡の模様は鏡背に鋳出するもので、表はぴかぴかに磨いて化粧用として用いるのが一般的で、時には錫を張って利用することもある。ただ、相応な技術者がいないと錫を張ることができないので、その点ではぴかぴかに磨くしかなかったであろう。

最近になって、霧島市隼人町神宮3丁目の『宗円坊屋敷跡』（旧弥勒院跡境内にあたる。）からも松喰鏡が出土した（重久2012）。出土状況は土坑13号の北側の頭部近くから、天神段遺跡の1号墓と似ている。宗円坊屋敷跡の土坑の時期が室町時代で、松喰鏡は室町時代まで伝世したことになる。この松喰鏡の計測値は径は11cm、重さは87gである（図1-2）。

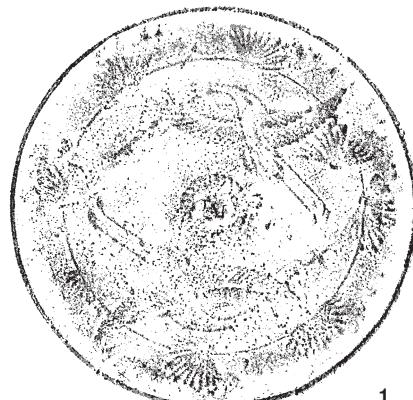
鹿児島県内で松喰鏡を所蔵している神社は、薩摩川内市の新田神社、姶良市蒲生町の蒲生八幡神社、湧水町栗野の勝栗神社などで、これらの鏡は、國學院大學による調査によって資料化されたものである（相山ほか1998）。

新田神社の松喰鏡の時期は鎌倉初期で、その径は18.2cm、縁の高さは0.3cmである。蒲生八幡神社の松喰鏡の時期は鎌倉時代前期と言われ、径は18.4cm、重さ330gである。また、勝栗神社の松喰鏡は鎌倉時代後期のもので、径が23cmもあり相当に大きいことが分かる（図2）。

なお、蒲生八幡神社の鏡類はすべてが懸け鏡であった。しかもこの鏡類は、蒲生氏の存続年代（1123年ごろから島津氏に滅ぼされる1557年まで）に限られていることから年代が明確で、大正7年（1918年）に「秋草双雀鏡」1点だけが指定された。

さて、鶴が松を喰える構図は、一般的には考えられないものである。したがって、どこかにその淵源があるものと考える。もともと鏡の模様は、その時代に近い時代の美術・工芸品や時に和歌をも題材にして鏡背の模様が鋳込まれるものである。

その松喰鏡の模様の淵源は、法隆寺の蓬莱山廈絵袈裟



1



2

図1 県内出土の松喰鏡

箱（縦50.5cm、横41.7cm、高さ5.3cm）である。すなわち、袈裟箱の一辺に大亀が蓬莱山に乗せた絵がある。しかも、中国では亀は仙人を支える役目をもつものと明確に位置付けられているので、蓬莱山を乗せるのは当然の姿であったろう。なお、蓬莱山は中国の神仙思想の三神山の一つで、東方の海上にあって仙人が住み、そこに不老不死の靈薬があり、宮殿が建っていると言われている。

そこで、法隆寺の袈裟箱をみると、その製作年代がおよそ1121年ごろと推定され（保坂1973）、この時期から数十年すると松喰鏡が出現することになる。よく観察してみると、大亀はもちろんのこと、高い崖状の山に松が6本見え、宮殿らしき2階建ての建物が1軒、その他仙家が5軒ほど観察され、階段まで表現されている。正直言ってこの蓬莱山に宮殿があるとは解釈していなかったこともあり、神仙思想がこれほど具体化されていることに少々驚いている（図3）。

この蓬莱山は、間違いなく徐福伝説を具現化したものであると考える。徐福とは、秦（BC221－BC206）の始皇帝（BC259－BC220）の28年（BC219）に不老不死の靈薬を求めて童男女数千人を率いて入海求仙し、海中で見つけた島の王となったという。その行き先が日本と考えられ、この伝説を具現化したのが製表箱の蓬莱山とい



図2 県内神社所蔵の大型松喰鏡

うことになる。製表箱の製作者は、この徐福伝説を相当に意識していたに違いない。

さて、この製表箱の蓋に松喰の絵が描かれており、この美術品がのちの松喰鏡となり、やがて今日でも時折見られる美術品へと繋がっている。しかも、蓬莱山はその後の鏡の中で生き続け、鎌倉・室町時代を通じて松喰鏡を観察することができ、やがて江戸時代の蓬莱鏡にまで引き継がれていった。

なお、これらの鏡の生産遺跡は長い間京都市内ではないかと推定されていた。12世紀から13世紀にかけては、



図3 蓬莱山がある法隆寺の製表箱

京都市郊外の白川地区でも鏡の鋳造遺跡が発見され、現在の京都大学構内遺跡であることが判明した。その後は、京都市の七条町・八条町の現在の京都駅の北側の西開発に伴って調査され、夥しい鋳型が検出され、白川地区以降の鏡などの鋳造遺跡が検出された。鏡の鋳型はもちろんのこと刀剣の鋳型まで発見され、青銅製の鏡のみならず鉄製品も扱っていたことまで判明した（久保1999）。

また、江戸時代に入ると大阪の発展に伴っていわゆる藤原某の柄鏡の鋳造が大阪でもできるようになった。

次に、蓬萊山を支える亀や鶴に関する文献について触れる。

古代中国の文献のBC140年成立の『淮南子』の卷17の説林訓に「鶴は寿千歳にして以て其樂を極め・・・」、同じく卷14の詮言訓に「亀は三千歳、浮游は三日に過ぎず・・・」とあってこの文献には亀は万年とは記されていない。

また、成立年代は不明だが、奈良時代に靈亀（715）や神亀（724）という年号からそれ以前の成立と思われる『述異記』に、「亀千年に毛を生ず。寿五千歳を神亀といひ、寿万年を靈亀」とあるので、亀は万年というのがある意味普遍化していくことになったと思われる。

次に、和歌のなかで鶴がどう謡われているかをみるとする。ただし、万葉集には鶴の和歌が多いため抜粋した。

1 「万葉集」（770年ごろ成立）

- (1) 足柄の 箱根飛び越え 行く鶴の
ともしき君は 明日さえもかも (1175)
- (2) 難波潟 潮干に立ちて 見わたせば
淡路の島に 鶴渡る見ゆ (1160)

2 「貫之集」（紀貫之の歌を集めた歌集）

延喜15年（915年）の五十賀の屏風の歌

- (1) わかやどの 松のこすゑに住むつるは
千世のゆかり とおもふべらなり
- (2) 千年まで 命たへたる 鶴なれば
君がゆき、を したふなりけり

3 「伊勢集」（平安中期の女流歌人の伊勢の歌集）

露かかる 菊の中なる あし注¹たづは
いま幾度か 千世がそふらむ（注1 田鶴のこと）

4 「紫式部日記」（平安中期の日記文学）

藤原道長（966-1027）の返歌を抜粋
あしたづの よはひしあれば 君がよの
千歳のかずも かぞへとりてん

など、様々の機会に鶴の千歳はうたわれている。したがって、これから述べる鏡背の模様には、まず鶴の立ち姿の鶴の番や、飛翔する鶴に関して種々の表現が用いられてくる。さらに、蓬萊鏡の鏡背に亀が表現されるのはやや遅れて、鎌倉時代後期から末期近くになってからで

ある。

まず、鎌倉時代前半の蓬萊鏡（図4-1）は、計測値が径19.4cm、縁の厚さは0.5cm、重さは330gである。蓬萊山はやや崩れたとはいえその根元には州浜が描かれ、模様はゆったりし、まるで空間美を楽しむように鋳込まれている。素紐である。

鎌倉時代中期の蓬萊鏡（図4-2）は、計測値は径19.8cm、縁の厚さは0.4cm、重さは408gである。蓬萊山は鎌倉時代前半の蓬萊鏡よりも締まっていているが鶴の後ろに葦を表現し、さらに、上方の空間に飛鳥まで鋳込まれ、しかも内圈の外まで飛び出している。少しだけ窮屈になったように思われる。

鎌倉時代末期近くの蓬萊鏡（図4-3）は、計測値は径が19.7cm、縁の厚さが0.2cmで、重さは量ることができなかったが、やや薄くなっている。蓬萊山の根元に州浜が展開し、番の鶴はまるで嘴が接し、餌でももらっているかのようである。鎌倉時代前半～中期の蓬萊鏡に比べてやや蓬萊山が大きくなり、紐に亀が進出して亀紐と呼ばれるようになる。鶴の後ろには葦が生え内圈を飛び出してやや大きく成長した葦である。

ここで、蓬萊鏡の鏡背模様の変遷に触れてみる。

鎌倉時代後期に鏡背に亀が鋳込まれるようになる。鎌倉時代末期から室町時代初期に亀が鏡の紐に移り、やがて亀紐となる。また、鶴の嘴だけは同じ方向をして亀紐は南の方角をさしている。

室町時代中期になると鶴と亀の嘴が同じ方向を向き、これを三嘴という。すなわち、蓬萊鏡に三嘴が現れてくるようになる。

次に、室町時代の蓬萊鏡の変遷をみる。いずれも三宅島の鏡で、神社の所有であったり、個人の所有であったりする。

室町時代前半の蓬萊鏡（図5-1）は、計測値は径が11.71cm、縁の厚さが1.5cm、重さが295gである。鶴の根元には州浜が展開し、立っている鶴の足元に小さな亀が鋳込まれている。紐は大きな亀紐で州浜に立っている鶴と飛翔している鶴とが表現されている。先述の亀紐である。

室町時代中期の蓬萊鏡（図5-2）は、計測値は径が11.1cm、縁の厚さが0.8cm、重さは228gである。蓬萊山が大きく曲がり、亀の嘴と鶴の嘴が接している。これも三嘴という。この傾向が確実に増える時期である。

室町時代後半の蓬萊鏡（図5-3）は、愛染明王蓬萊鏡といい、その計測値は径が11.2cm、縁の厚さが1.12cm、重さが328gである。今までのように州浜が表現され、蓬萊山の横に仏像が鋳込まれている。番の鶴と亀紐とで三嘴をなし、鏡の模様も大変窮屈になっている。

ところで、伊豆諸島は全国的に鏡の多い島々で、三宅島だけに85面の和鏡がある。その他に鏡の多い所は山形

県の出羽山の鏡池、伊勢湾の入り口にある神島、宮崎県の西の正倉院を建立した神門神社などである。(橋口2001)。

次に、安土・桃山時代の鏡に移る。

都城市の中世・近世の墓壙のある尾崎第1遺跡（貴船寺跡）の表土から発見されたものが、この時代に相当す



1



2



3

図4 蓬萊鏡の変遷

る。(図6)

蓬萊山は消えて松と秋草（又は羊齒<裏白>）の模様が鋳込まれており、飛んでいる番の鶴と亀紐とが三嘴となっている。よくもこんな狭いところに室町時代の鏡の模様を採用したものである。なお、柄の部分は唐国からの影響のもと成立したと考えられている。なお、この柄鏡の計測値は、径が7.44cm、縁の厚さが0.6cm、柄の長さが9.69cm、重さが235gである（棄畠2006）。

また、この種の柄鏡に「天下一」と鋳込まれた鏡が織



1



2



3

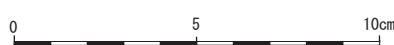


図5 室町時代の和鏡の変遷



図6 都城市尾崎第1遺跡出土柄鏡

田信長（1511–1562）のもとに献上され、初めて贈られた時には、ここにも天下一がいるのかという程度であったが、二度目の柄鏡にも「天下一」と鋳込まれており、何人天下一がいるのかと少し不機嫌であったという。のちに、「天下一」の次に鏡の製作者の名前があるのは桃山時代になってからである。なお、ここに示した柄鏡は桃山時代のもので、この時期の特徴として柄の付け根に「受け部」が付く（久保1999）。

さらに、このような柄鏡の柄の長い17世紀を通じて用いられたが、柄があるので紐の部分は不要なのに付けられたままになっている。当然のように円鏡も普及したが紐は付いている。

次に、蓬莱山の名残と言えそうな鏡を紹介しよう（図7）。松竹の根元の右側に僅かに石が確認できる。その石が蓬莱山の名残である。したがって、厳密に言えば蓬莱柄鏡としてもよいが、ここでは松竹柄鏡としておく。足元に僅かに州浜が残り飛ぶ鶴と立姿勢の鶴があり、立鶴の右に靈亀がいる構図で、全体の右側のある文字は「□□越後守藤原種廣」とある。計測値を示せば、重さだけで505gである。

次に、珍しい江戸時代の蓬莱鏡を紹介しよう。

この柄鏡は、薩摩川内市入来町の入来郷土館所蔵である（図8）。久しぶりに再来したような蓬莱柄鏡である。

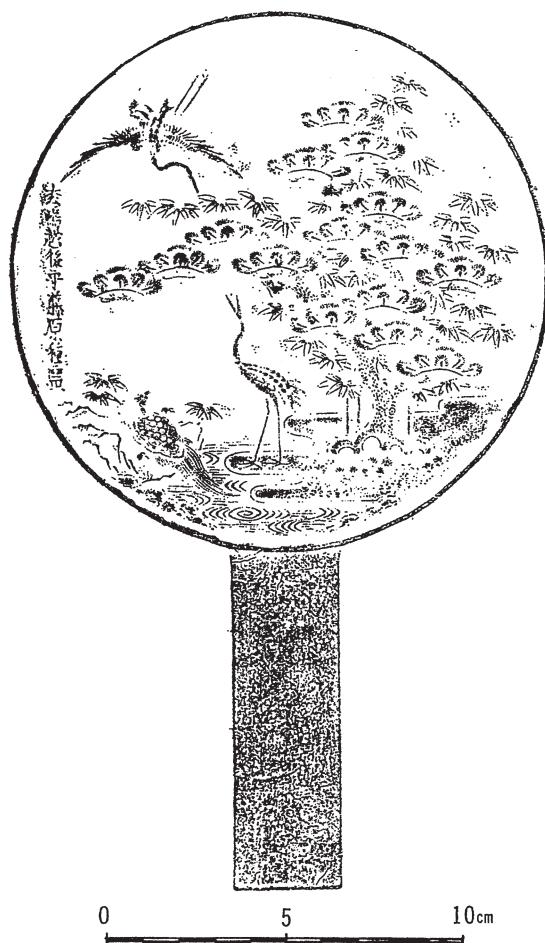


図7 松竹柄鏡

亀は長寿の靈亀となり、その上に蓬萊山が乗り、そこに松竹梅と菊花が咲き、まさに18世紀の日本的な蓬萊柄鏡である。作者は、藤原英政とあり、「天下一〇〇〇〇〇」となっている。この鏡をはじめて見たときに、万年を迎えた亀（靈亀）でも蓬萊山を乗せ、しかも江戸時代の特徴でもある松竹梅が生える蓬萊山とはいから不思議であった。計測値は径が20.75cm、柄の長さが9.5cm、重さが541gである（図8）。

次に、鏡に鋳込まれている「天下一〇〇」について述べる。先述したように、信長は不機嫌であったが、豊臣秀吉（1536–1598）が許可して以来、鏡師の間で鋳込まれてきた。しかし、徳川綱吉（1646–1700）が「天下一とは何事ぞ」と禁止させ、しばらくの間は「天下一」だけが消える時期もあったが、時が経つに連れて再び「天下一〇〇〇」と柄鏡に表現されるようになった。

最後に、取り上げる鏡が松竹梅柄鏡の典型的な例である。第26代当主島津齊宣（在位1797–1841）の次女於隣（おぢか）（松寿院）は、生後3か月で種子島家に輿入れし、1811年、種子島家の久通と結婚した。18歳を皮切りに生涯で一男四女をもうけるが、一男二女は早死にした。32歳の時、久通が死亡し、その後世継ぎができるまで13



図8 18世紀の蓬萊鏡（入来郷士館所蔵）

年に渡って種子島の島政を担当することになった。この間に、薩摩藩の莫大な援助のもと万延元年（1860）から赤尾木湊の改修に取り掛かり、岸岐を湊の入り口の両方に造って海難事故が起こるのを防いだ。この岸岐は、現在でも使われている。すなわち、現在の西之表港の基礎を作ったことになる（鮫島2011, 2014）。

於隣の縁組あたり、2面の鏡を調達している。一つは、丸の十の字の鏡で、もう一つは松竹梅柄鏡である。すでに蓬萊山ではなく、典型的な松竹梅柄鏡で、下の方に州浜があり、鶴は子供まで鋳込まれている。さらに番の靈龜まで表現され、明らかに子孫繁栄を願った柄鏡である。その製作時期は19世紀初めということになる。

しかも、特注品の白銅製柄鏡で、計測値を示せば、径が21.2cm、縁の厚さが0.4cm、重さが878gをなす（図9）。しかも柄には簾を巻いているが、柄の簾がしっかりと残っているのもまた珍しい。

以上で袈裟箱の鶴と亀、蓬萊山の鏡の上での変遷の概説を終わることにする。

なお、本編をまとめにあたり、淮南子については永山修一氏の助言を受けた。さらに、次の方々のお世話になった。まず第一に、蒲生八幡神社と交渉にあたってくれださった（公財）埋蔵文化財調査センターの方々、そして口添えをしていただいた姶良市教育委員会文化課の方々である。個人では都城市教育委員会の棄畠光博氏である。心から御礼申し上げる。また、保坂氏の文献に大いに助けられたことを明記し、謝意を表する。（橋口尚武）

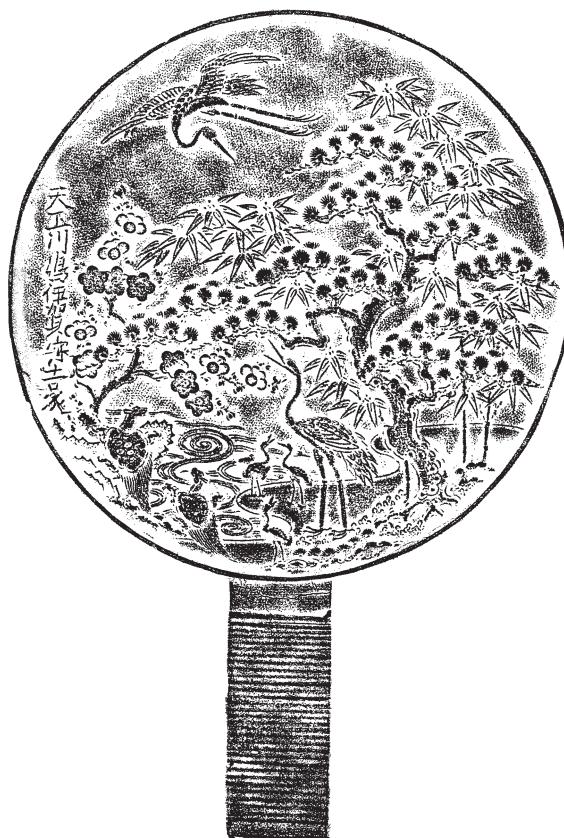


図9 松竹梅柄鏡（西之表市史料館所蔵）

参考文献等

- 久保智康 1999 『日本の美術 394 中世・近世の和鏡』 至文堂
- 棄畠光博 2006 『尾崎第1遺跡（貴船寺跡）都城市史 資料編 考古』 都城市市史編纂委員会
- 鮫島 穎 2014 『種子島物語』 和田書店
- 鮫島安豊 2011 『種子島歴史』 たましだ舎
- 重久淳一 2012 『宗円寺坊屋敷遺跡－弥勒院発掘調査－』 霧島市教育委員会
- 橋山林継他 1999 『薩摩の神社奉納鏡－大型和鏡を中心として－』 國學院大學 考古学資料紀要第14 國學院大學考古学資料館
- 橋口尚武編 1975 『三宅島の埋蔵文化財』 伊豆諸島考古学研究会・三宅村教育委員会
- 橋口尚武 2001 『黒潮の考古学』 同成社
- 保坂三郎 1973 『和鏡』 人文書院